

FADO

13

Janeiro 1997

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

おはよう 新しい年
朝の光をうけた都会の見慣れた風景さえ
輝いている

おはよう 新しい年
吹いてくる風を大きく吸い込む
私は風をはらんだ帆船になる

私はもう振り向かない
過ぎ去った日々は
ゆうべ
思い出の小箱にしまってしまったから

相も変わらず
一人で迎える新年だけど
かわいそうになんて思わないでください
結構いいもんです
誰にも邪魔されず
きままに過ごせる時があるってことは

愛する人がそばにいたら
それに越したことはないけどね

一人だけじゃなくて
だれしもみんなが良くなる
一年にしたいな

本年もよろしくお願ひいたします。

月田秀子

③

月田秀子の昨日、今日、明日...

「月田さん、お願ひがあるんですが、BS2で『平成古寺巡礼』という番組に出演お願ひしたいのです。ロケ先は、大阪、天野山・金剛寺で、フォト・ジャーナリストの長倉洋海さんと一緒に、まわってほしいのです。」2年前のNHKの「にんげんマップ」の担当ディレクターだったY氏から突然の電話が入ったのは、東京

から、時事通信社で報道カメラマンとして勤めるかたわら、ライフワークとして、様々なジャンルで活躍する日本人のポートレートを撮影し続けている大高正人氏の取材を受けているときの事である。どんな番組か、見たこともないので、とりあえず番組を見てから返事させてくれと言って電話を切った。

「長倉さんは、僕の先輩です。素敵なお人です。一緒に仕事をされることを勧めます。」大高氏が驚いたように言った。大高氏との出会いも意外な所であった。新内伸三郎さんのお嬢さん取材した関係で9月、東京の三越劇場での新内とファドのジョイントコンサートにでかけ、ファドに感銘をうけたのがきっかけだという。大高氏によると、長倉氏は、時事通信社を退職後フリーカメラマンとして、中東、アフガニスタン、エルサルバドル等の戦地の写真を撮り続けて行くうちに報道として被写体にカメラを向けるのではなく、人間として、そこに懸命に生きようとする人達を写すようになった人だという。しかも、一度訪れたところを、再訪することを旨に。

数日後、NHKの担当ディレクターのK氏が「地を這うように一長倉洋海全写真集」を送ってくれた。カメラマンとして、人間として苦悶する姿に私自身を重ねてみもし、戦地という異常な状況で「生」と「死」をみつめシャッターを切り続けるかれの真摯に生きる姿勢に久し振りに鮮烈な感動を覚え、震えながら、頁をめくっていった。涙が込み上げて、心が熱くなってゆくのがわかった。

それ以来、解釈が変わった歌も、思い入れが深まった歌もある。私の目は自分の内面だけでなく、戦争という悲惨な事実、そこで否応なく「死」に追いやられてゆく名もない貧しい人達、残された者達のやり場のない悲しみへと向かう。「メウ・アモールわが愛」は、長倉さんと出会う前に作った詩だが、その後、12月27日の巴里野郎のライブで歌ったとき、氏の写真が次から次へとよぎり、何者かにつき動かされるように歌った。

ひとり砂浜にたたずみ くちざさむ
いつかあなたが歌ってたこの歌を
はるかな旅路に 沈む夕日に
Meu Amor もう一度歌ってよ この歌を
Meu Amor もう一度

塵のなかにも 花は咲き 陽は微笑む
あなたの こぶしに あなたの震える肩に
あなたの涙に あなたのほほえみに
Meu Amor 歌おう この愛 この命
Meu Amor 忘れない

メウ・アモールわが愛-

日本人とファド

1636年、徳川幕府は「鎖国令」を發布、続いて1639年「ポルトガル人の渡航禁止」、1641年に「オランダ人を出島に移す」ことによって鎖国を完成させた。これにより、日本人とポルトガルの関係は完全に途絶することになった。以後、約2世紀半にわたる鎖国が続くことになったが、1853年の「ペリーの浦賀来航」、1858年の「日米修好通商条約の締結」により、16・17世紀のキリシタン使節以来の2世紀半の鎖国を脱して、初めて近代欧米の世界を駆けめぐり、その活況を見た。幕府は1862年、遣欧使節竹内下野守保徳(やすのり)以下37名の使節団を、フランス、オランダ、プロシア、ロシア、イギリス、ポルトガルに派遣した。ポルトガル訪問は、「天正少年使節」以来、280年ぶりである。一行は、1862年10月16日(文久2年閏8月23日)にリスボアに入港し、10日間のリスボア滞在后、10月25日(9月3日)リスボアを出港して帰国の途についた。

さて、ここに一行中の副使・松平石見守康直の従者、市川渡の滞在日記がある。「尾鯉欧行漫録(びようおうこうまんろく)」と題する日記であるが、その中に注目すべき一文がある。これは市川渡がリスボア滞在中に、曲馬団見物に出かけ、サーカスの余興として聞いた音楽を描写したもので、ここにその一文を紹介することにしよう。

「…最後に一人、鼓弓を抱出で、数曲を演奏す、炉六弦八音を発し、あるいは燕の語る如く、鶯の歌の如く、潺湲(せんかん)たる咽流、蕭颯(しょうさつ)たる松籟、虎のほえるが如く、蟲吟の如く、数百の音律を模倣せざるは無し…」と。

私はこれは「ファド」ではないかと思うのである。市川渡が、このポルトガルの民族古曲を聞いたのは、一行の宿泊所、リスボア市内のコメルシオ広場の西方、アレクリム街の南端に位置する「HOTEL・BRAGANÇA」から北西14.5丁(約1600m)の地点(パイロ・アルト地区と推定)の曲騎場である。「ファド」はすでに19世紀において、リスボアで広く聞かれており、当時の「ファド」は、リスボアのほとんどが坂道をのぼらなければならない都心の周辺地区の、民衆的な盛り場で歌われていた。19世紀の半ばには、マリア・セヴェーラなる有名なファド歌手が登場しており、一行は場所・時期共に「ファド」を聞くことが可能であった。文中、鼓弓とあるのはギターであるが、このギターが、どのようなギターであるかは明らかではない。また、この演奏がファド歌手とその伴奏によるものか、ギターの独奏か、あるいはその弾き語りのようなものかは明らかではない。現在「ファド」と言えば、ヴォーカルの音楽であり、ソロ歌手によって歌われ、伴奏をつけるのは伝統的に「ギターラ」と「ヴィオーラ」とされている。ポルトガルにおいて「ギターラ」は18世紀の内に

かなり流行したとのことで、このギターは普通のギターではなく、イギリスギター(シターン)呼ばれていて、のちにポルトガルのギター(ギターラ・ポルトゥゲーザ)となったとのことである。

「ファド」は当初、ダンス音楽であったらしく、それが19世紀の半ばに歌が中心となり、物語的な内容を即興的に歌うスタイルが出来て、今日までのあらゆる「ファド」の基本となっている。したがって現在の伝統的な「ファド」の演奏スタイルが確立するまでに、種々な演奏スタイルがあったように思われる。現に月田秀子は、「ヴィオーラ」だけの弾き語りもやるし、「ヴィオーラ」の伴奏だけで歌っていたし、著名な「ギターラ」奏者は、ソロ歌手ぬきの演奏も行っているのである。現在、「ファド」は他の音楽的要素を吸収しながら変化しており、昇華、止揚、継承、再創造をしているのである。「ファド」がどんなに変化しようと、その基本を維持している限り「ファド」はファドである。1862年、幕府遣欧使節団の一員が聞いたポルトガルの民族古曲なるものは、当時の状況から判断して、それが「ファド」であったと断定せざるをえないのである。だとすれば、日本人で最初に「ファド」を聞いたのは、サムライ市川渡と同席した人達である。

「ファド」が、日本人に一般的に知られるようになったのは、1954年作のフランス映画「過去を持つ愛情」である。映画の中で歌われた「暗いはしけ」が、世界中で大ヒットし、「ファド」とアマリア・ロドリゲスの名は全世界に知られるようになった。1970年の大阪万国博のゲストとして初来日して以来今日までの数回の公演を行って、多くの日本人ファド・ファンを魅了した。

このアマリア・ロドリゲスの「ファド」に魅せられて、当時シャンソン歌手であった月田秀子は、サンケイホールでの「セカンド・コンサート」を終えると、翌年1987年に「ファド」を勉強するためにポルトガルに旅立った。留学中は大変な苦労があったようだが、その間、コリゼウ劇場での「ファド大祭典」での成功、その後のマリア・マトス劇場での「リスボア初リサイタル」に出演して、当地の新聞各紙に絶賛され、「日本の心を歌うファド歌手」と呼ばれた。帰国後の、1989年、第1回のファドコンサートを開き、以後、草の根のライブ活動を行い、ここに日本で最初の本格的なファド歌手が誕生することになって今日に至っているのである。1996年秋、私はポルトガルを訪れ、リスボアとポルトで、本場のファドライブを聞く機会をえた。いづれも聴衆の大半は日本人であった。1862年、サムライ市川渡が日本人として最初に「ファド」らしきものを聞いてから134年の歳月が経過した今日、ポルトガルの「ファド」と月田秀子の「ファド」は日本人の中に、深く、静かに、着実に、浸透していることは疑いのない事実である。

H・T生

インターネット版月田秀子ファド倶楽部のホームページが出来ました!!

インターネット上に月田秀子ファド倶楽部が完成いたしました。ただ、まだ未完成のため出来はあまりよろしくありませんので当分の間、突貫工事で(?)修正していく予定です。完成後は一月にいったんの予定で新しくしていきたいと思いますが、ライブ情報などは随時追加して柔軟に対応してゆくつもりです。御覧になられた方の御意見、御要望をお待ちしておりますのでよろしく願います。

f. h

ficção

読切連載
秀子のエピソード帖 [その9]
内間 天馬

五木寛之氏とファドの世代

ニワトリの首をギューッと締め上げて出てくるような声で歌うのがファドですかね？ 今から13年ほど前、初対面の月田さんに言った筆者の失礼な言葉。これは五木寛之氏のエッセイに出ていた受け売りです。アマリア・ロドリゲスの名を幸うじて知っていた筆者と違って、『暗いはしけ』に独特の憂愁を憶える世代がいます。それは戦争前の昭和二桁生まれ。敗戦後の貧しさを肌で憶えている世代と言えるでしょうか。その代表が五木寛之氏じゃないかな。彼は作品の中で、何度も何度もファドを取り上げています。ご自身のラジオ番組で、初めて月田さんを迎えた時の「やっと来て頂いた」と言う歓迎返りは、聴取者にもはっきり分かった筈です。

先日のファド倶楽部総会で、思いがけず再会した、南海サウスタワーホテル社長の本田氏。高校の大先輩ということもあって、気安く述べてくれた、彼と『暗いはしけ』との劇的な再会。戦後の混乱期に青春時代を送った本田氏。その多感な時代に、彼の心の琴線に大きく触れたあのメロディー。実は、彼は、ついこの間まで、その歌が『暗いはしけ』と言うタイトルだとは知らなかったのです。が、あの青春期の数多くの思い出と重なるあのメロディーをずっと心の中でくちづさんできたのです。昨年、偶然参加した月田さんのコンサートで、「あっ、あの歌や」。ながい間、探し求めてきたあの歌との出会い。感動で胸が詰まりそうな想い。歌が終わるや否や、思わずステージに駆けつけ、「この歌、何ていうんですか？」これには月田さんも呆気に取られたそうです。

熱い想いで語る彼の話しが終わったちょうどその時、総会の最後を飾る、月田さんの歌が始まりました。そして、一番最後に『暗いはしけ』。そっと本田氏の横顔をのぞき見ますと、固く閉じた目からひとすじの光るものが…。その光るものの中にあるのは一体何でしょうか。それは間違いなく五木寛之氏をはじめとする日本のファドの世代が抱くものの象徴ではないでしょうか。

cartas

●一月田さんの織りなす宇宙のなかにいると「もう少し生きてみようか」と思えてくるのはいつももながらのことなのですが、9月に短い時間でしたがファドを生んだ風土に触れることができたのが殊更それを強く感じました。そして何時か月田さんとポルトガルに一緒さそっていただけたらと願っておりますが…。月田さんの活動の拠点が関西である為東京での公演やライブが少ないことは充分承知しておりますが、来年は何かもう少し増やしていただけないものでしょうか？そして大阪にいけなかった人達が当日のビデオを待っておりますので出来ましたらお知らせくださるようお願いいたします。全く思い掛けずテレホンカードに写真を使っていただき大変嬉しく光栄に存じます。ありがとうございました。ではまた月田さんと月田さんの宇宙に会える日の早い事を願っております。

(東京/F. J子)

●前略 サンケイホールコンサートの祈はありがとうございました。仕事をかかえておりましたので、終了後ごあいさつもせず職場に急ぎ戻りました。その後徹夜仕事が何度か続いたりしてつまらぬ時を重ねました。力のこもったステージを拝観。大きなホールにはまたその良きがあることは分かりつつも、私はあの淀屋橋のビルの地下での月田さんの肉声の歌に魅力を感じるものであります。1月17日の震災2年にむけての仕事に追われながら年の暮れを過ごしています。どうか良いお年をお迎えください。

(大阪/K. T)

●前略 突然お便りいたし申し訳ございません。私、今問題の骨粗鬆症のため、よく寝込み不安と緊張の為、夜中によく目を覚まします。朝の4時ふとラジオをかけると“心”の番組、い寄せられる様に貴女様のお話に耳を傾けました。「何故、私だけこんな病気になるんだらう」と不足ばかりいって泣き言ばかりいって主人を困らせておりました。でも貴女様の痛み、悲しみ、苦しみ等死んでしまったら何もないのだから、それらを受け留めて行こうと言われたのを聞いた時、本当にそうだ！母は38才で4人の子を残し、父は3年後50才で他界し、さぞ悔しかったらうと寝込んだ時涙に枕を事再三あります。又、下手でも歌に魂がこもってればいいのか。魂という言葉に魅

かれました。1才2ヶ月になる孫がおりますが喋れなくても魂と魂が触れ合ったような気がしてハッとする時があります。それに私もファドが好きになりそうです。腰や背骨を痛めておりますが私なりに一日一日を精一杯生きて行きたく思っております。

(東大阪市/I. T子)

●立冬も過ぎ、一雨ごとに寒気が加わって参りましたが、お元気でご活躍のことと存じ上げます。スケジュール表を眺めては、飛んで行きたい思いに駆られCDとテープで聞かせていただいております。今週末は小語でいらっしやいますね。一昨年NHKのテレビ放映で拝見し、すぐ友人と3人でライブにお伺いしましたのが、お目にかかった最初でした。初めての海外旅行がポルトガルで、リスボンで聴いたファドにすっかり魅せられてしまいましたが、日本でファドを歌う方が居られ、しかも大阪で聴けるとは思いもよらぬことでした。それで早速出掛けた訳です。月田さんの素晴らしい歌に思い出が重なり、感動で胸が一杯になりました。その後、吹田のメイシアターでの公演でもファドを堪能させていただき、また聴きに行きましようかと3人で語り合いましたのに、今春その中の一人の友人が逝きました。親友を失う悲しみは唯えようもなく、心身共に絶えております。遺った友人と1年ばかり月振りに月田さんのファドを聴きにお伺いしたのが7月末で、倶楽部にも入会させていただきました。9月のアートクラブのライブで、『友は遠く』を拝聴しました時は、涙が滞れました。これからは友人への追悼の想いも籠めまして月田さんのファドを聴かせていただきたく存じます。…お元気で。

(大阪/T. K子)

●12月13日にはありがとうございました。「素晴らしいコンサートだった」と誰からも喜ばれて本当に充実感があります。ポータルへはもちろんですが、ギターへの反響も大でした。「来年もぜひ」と、もうアンコールが入っています。またやりましようね。

(名古屋/M. S子)

informação

<月田秀子のスケジュール>

- | | | | |
|-----------|--|--------------------------------|-----------|
| 1月 9日 (木) | 京都/四條河原町・シャンソニエ「巴里野郎」
①8:00 ②9:00 ③10:00 (入れ替えなし) | ☎075-361-3535
ポルトガルギター:池側 忠 | ギター:野上圭三 |
| 10日 (金) | 京都/四條河原町・シャンソニエ「巴里野郎」
①8:00 ②9:00 ③10:00 (入れ替えなし) | ☎075-361-3535
ポルトガルギター:池側 忠 | ピアノ:河村真千子 |
| 13日 (月) | 大阪/心齋橋・「アートクラブ」
①8:00~ 3回ステージ (入れ替えなし) | ☎06-253-0827
ポルトガルギター:池側 忠 | ギター:佐野健二 |

1月15日~2月7日まで、ポルトガル旅行の為、ライブ活動はお休みです。

- | | | | |
|-----------|--|---------------------------------------|-----------|
| 2月11日 (火) | 和歌山/県立近代美術館
開演/7:00 | ☎0736-43-2277 (田中まで)
ポルトガルギター:池側 忠 | ギター:野上圭三 |
| 14日 (金) | 大阪/西中島南方「三裕の館」
開演/8:00 | ☎06-304-1745
ポルトガルギター:池側 忠 | ギター:野上圭三 |
| 24日 (月) | 大阪/心齋橋・「アートクラブ50回目記念ライブ」
①8:00~ 3回ステージ (入れ替えなし) | ☎06-253-0827
ポルトガルギター:池側 忠 | ギター:佐野健二 |
| 27日 (木) | 京都/四條河原町・シャンソニエ「巴里野郎」
①8:00 ②9:00 ③10:00 (入れ替えなし) | ☎075-361-3535
ポルトガルギター:池側 忠 | ギター:野上圭三 |
| 28日 (金) | 京都/四條河原町・シャンソニエ「巴里野郎」
①8:00 ②9:00 ③10:00 (入れ替えなし) | ☎075-361-3535
ポルトガルギター:池側 忠 | ピアノ:河村真千子 |
| 3月 1日 (土) | 長野/諏訪湖の見えるレストラン | ☎0266-73-4116 (伊藤まで) | |
| 3日 (月) | 山梨/甲府・フランスレストラン「ベルク」 | ☎0552-75-2646 (長谷部まで) | |
| 14日 (金) | 山口/徳山「BAR」 | ☎0834-31-9308 | |
| 15日 (土) | 広島/「聖ヨゼフ教会」 | ☎030-635-5970 (菅野まで) | |
| 16日 (日) | 山口/田万川町町民会館 | ☎050-662-7496 (大東まで) | |
| 27日 (木) | 京都/四條河原町・シャンソニエ「巴里野郎」
①8:00 ②9:00 ③10:00 (入れ替えなし) | ☎075-361-3535
ポルトガルギター:池側 忠 | ギター:野上圭三 |
| 28日 (金) | 京都/四條河原町・シャンソニエ「巴里野郎」
①8:00 ②9:00 ③10:00 (入れ替えなし) | ☎075-361-3535
ポルトガルギター:池側 忠 | ピアノ:河村真千子 |
| 29日 (土) | 福岡/ガスホール「五木寛之論楽会」 開演/3:00 | ☎03-3437-9584 (小村まで) | |
| 31日 (月) | 大阪/心齋橋・「アートクラブ」
①8:00~ 3回ステージ (入れ替えなし) | ☎06-253-0827
ポルトガルギター:池側 忠 | ギター:佐野健二 |

●昨年12月の大阪サンケイホールでの『TSUQUIDA HIDEKO FADO CONCERTO'96』に際してはご声援ありがとうございました。サンケイ企画とわが月田秀子ファド倶楽部との共催だったのですが、入場者数は800名余りと、去年と比べると400名程減ったとのことで人数からするとちょっと寂しいコンサートではありましたが、会場の皆様熱いご声援のおかげで月田もしっかり燃焼し尽くしました。ファドに大きな会場は向かないとのご意見ももつともではありますが、月田はめげません。続けます。来年のサンケイに乞うご期待。

なお、当日のライブテープがどうしても欲しい方はご一報ください。何とかダビングしてお渡しするようにします。月田がなかなかつかまらない場合は許してください。

●冒頭にもありましたように、NHK衛星放送BS2の『平成古寺巡礼』(毎週日曜日夜11時15分から25分間、再放送木曜日朝6時25分放送)のロケが1月13日から2日間入ってますが放送日はまだ確認できてません。悪しからず。

●昨年12月のファド倶楽部総会の際に、野上圭三さんのCD『大地母神』をお申し込みいただいた方ご一報くださいー!!!

(2枚すでにお支払い済みとの事です。住所を書いた紙を紛失したとのことです。)野上圭三 (TEL080-530-1227)まで。

■編集後記

来号からは、誰かに編集・発行をしてもらおうぞ、と言い続けて、毎度の事ながら、一人天手古舞で発送にこぎつけました。大晦日も正月もなく今回はT君にずいぶん助けて貰いました。夏の終りに体調を崩してから、なるべく人に甘えるようにはしているのですが、これがなかなか至難の技。私抜きで動く倶楽部づくりにはまだまだ時間が掛かりそうです。焦らずにぼちぼち行こう。大晦日の前日、干し物をして、持っている貴重な一枚のブラジャーが隣のマンションとの間に、ひらりひらりと落ちていきました。考えあぐねんだ結果、階下の新婚のカメラマンに脚立を借りることにしました。夜はなんだから朝早く

に取ろうということで、無事回収に成功。カメラマン氏曰く、「ぼく、結婚していて良かったよ。でなかったら、引き受けるのはやばいよ。」今年最後の「オチ」でした。皆様にとって良い年でありますように。

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル第13号
- 1997年1月1日発行(季刊:年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒543 大阪市天王寺区味原町2-10 エヌケイビル 502号
- TEL&FAX 06-765-4808